

# 「使用説」での意味論と語用論

山田貴裕

京都大学

本発表の目的は、(1)「意味の使用説」を採った場合にも「意味論的側面」は残ると論じ、(2)その内実を明らかにすることにある。

意味の使用説とは、表現の意味はその使用から説明されるべきだ、という考え方である。この立場はWittgensteinに端を発し、Dummett、Horwich、Brandomらに受け継がれている。表現の意味が使用によって決定される、という使用説のテーゼは、客観的な意味論的内容を文脈依存的な語用論的内容に還元することを目論むものとして響くかもしれない。文の意味は、たださまざまな文脈の中で使用される仕方によってだけ決まる、というわけである。

本発表は、これに反し、使用説においても意味論的な側面は認められると述べる。ここで背景をなしているのは、さまざまな言語使用から一定の規則を抽出することができれば、それが使用説的な意味論になる、というアイデアである。使用は野放図であってはならず、同じ言語で語る以上、従わなければならない法則があるはずである。すなわち、客観的な側面が存在するはずだ。このことを、Brandomらの先行研究を参照しつつ論じる。

こうした使用説での意味論は、標準的な意味論とは大きく異なったものになるだろう。例えば、Brandomに従うならば、このとき文の意味内容を規定するものは真理条件ではなく、主張可能性条件となる。その結果、意味論の体系は、標準的とされるモデル論的なものとはならないことが予想される。本発表は、そのような意味論の諸特徴を明らかにする。